幼児が共に育ちあう友だち関係をつくるための援助はどのようにすればよいか

― 遊びの場において ―

目　　次

Ⅰ　研究テーマ設定理由 …… 1
Ⅱ　研究仮説 …… 1
Ⅲ　テーマを捉えた背景 …… 2
Ⅳ　研究内容 …… 3
　1　幼児理解 …… 3
　　(1)　幼児期にふさわしい生活 …… 3
　　(2)　遊びと友だちとの関係 …… 4
　　(3)　共に育ちあう意義 …… 4
　　(4)　友だち関係の育つ条件 …… 5
　　(5)　友だち関係で育つもの …… 6
　2　友だち関係の発達段階と教師の援助 …… 7
　3　教師の援助 …… 9
　4　友だちと十分に遊びこめる時間の工夫 …… 10
　5　環境の工夫 …… 10
　　(1)　友だちといて楽しい環境 …… 10
　　(2)　友だちと十分に遊びこめる環境 …… 10
　6　友だち関係を深めるための家庭との連携 …… 13
　　(1)　共に育ちあう友だち関係をつくるためのグループ懇談会 …… 13
　7　保育事例 …… 16
　　(1)　他児とかかわろうとしないT子 …… 16
　　(2)　自己主張が強く仲間はずれになったK男 …… 17
　　(3)　「こどもげんきかい」で共に育ちあった仲間達 …… 18
Ⅴ　まとめと今後の課題 …… 21
＜引用・参考文献＞

浦添市立前田幼稚園教諭
高江洲　弘　美

幼児が共に育ちあう友だち関係をつくるための援助はどのようにすればよいか

― 遊びの場において ―

浦添市立前田幼稚園　**高江洲　弘　美**

Ⅰ　テーマ設定理由

幼稚園教育要領には，幼児期にふさわしい生活の展開として「幼児期は自分以外の幼児の存在に気づき，友だちとのかかわりが盛んになり，相互にかかわることを通して自己の存在観や他者への思いやり，集団への参加意識などの社会性が著しく発達する時期である。また，そうしたかかわりの中で様々なものに対する興味や関心が深められ広げられる時期である。したがって，幼稚園の生活においては幼児が友達と十分かかわって展開する生活を大切にする必要がある」と示されている。

地域社会においては核家族化，少子化，塾やけいこ事の低年令化，交通事情などの様々な環境が一人遊びを余儀なくし，友だちと十分かかわることができない要因の一つになっていると思われる。幼稚園では，幼児がたくさんの友だちや教師とかかわり，その子なりの思いを出して生活している。「先生○○ちゃんは鉄棒でこうもりができるんだよ。僕も教えてもらったよ」「○○ちゃんと大きなお池作ったよ。明日も一緒に作るって約束したよ」「○○ちゃん熱があるからお休みするって，だからお見舞いに行ってくるよ」このように，友だち同士で教えあったり，他児を認めたり思いやる場面がある。反面

(1)　自己主張が強く，仲間はずれになる子

(2)　他児とかかわろうとせず，一人遊びの傾向にある子

(3)　友だちとかかわっているが，自分の思いを出しきれない子

などの幼児もいる。このような実態からどの子も伸び伸びと自由な雰囲気の中で，自己を発揮しながら友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わい，共に育ちあう友だち関係ができるように願っている。これまでの自分の保育実践を振り返ってみると，遊びの中で友だち同士のトラブルが生じたとき，教師が一方的判断で結論をだし解決することが多くあり，幼児の遊びを見守るまかせるなどの配慮が足りなかった。それは友だち同士による話合いで，育ちあう友だち関係が深まる芽を摘みとってきたように思われる。以上述べた問題点，教師の願いや反省から

(1)　友だちと心を通わせ喜び，驚き，くやしさ，悲しみなどを共有できる体験を積み重ねる。

(2)　一人一人の幼児が，どのように友だちとかかわっているか観察し遊びを通して把握する。

(3)　友だちと十分に遊びこめるような時間と環境の工夫をする。

(4)　他児とのかかわりが、抵抗なくできるような援助の工夫をする。

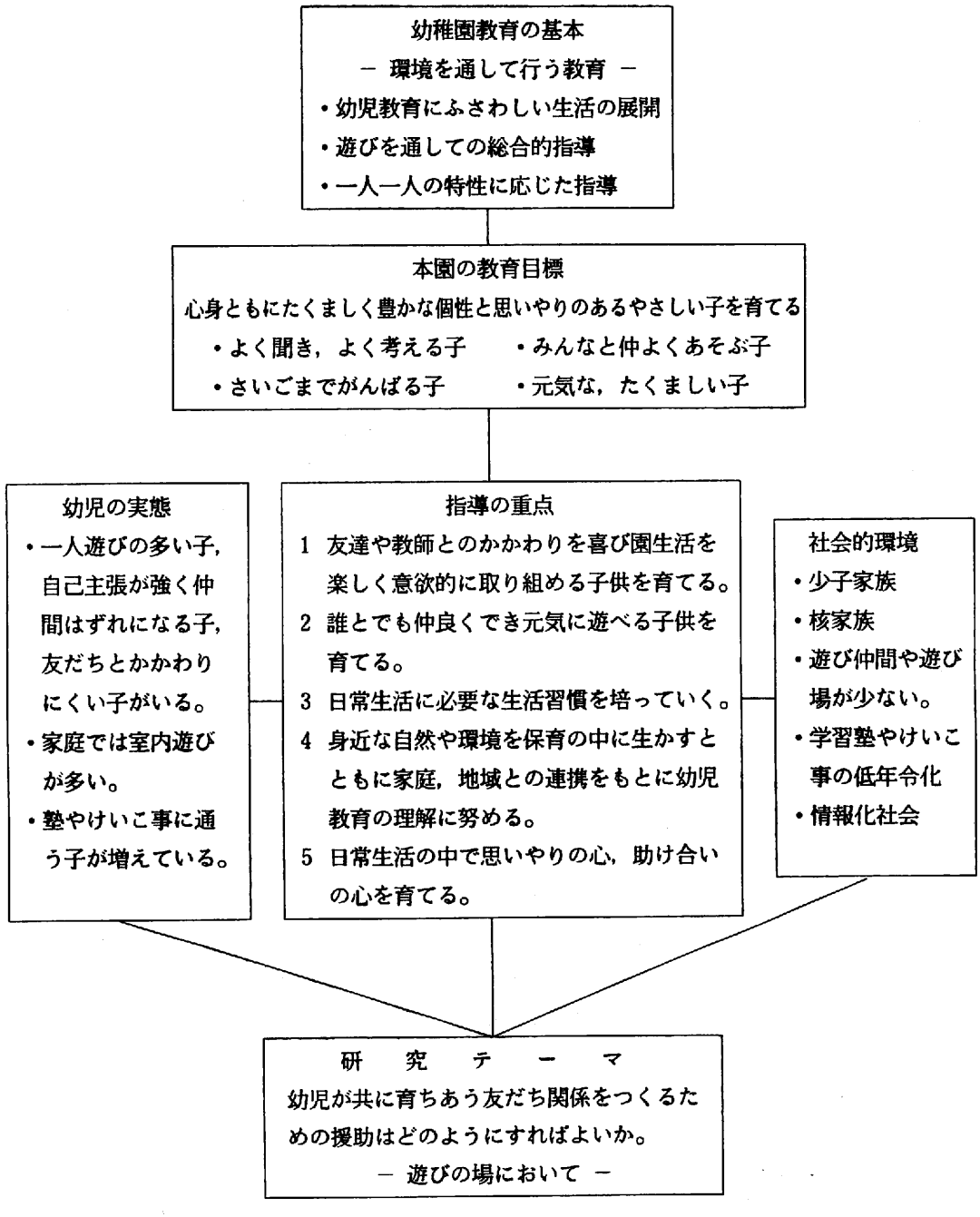
などの手だてを研究したいと思い，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究仮説

園生活において友だちと遊ぶ中で，一人一人の思いや行動を理解し，友だちとかかわりのもてる遊びを楽しみ充実させるための時間と環境の工夫をするともに，自分たちで遊びを展開し問題解

決をするための援助をすることによって幼児が共に育ちあう友だち関係ができるであろう。

Ⅲ　テーマをとらえた背景

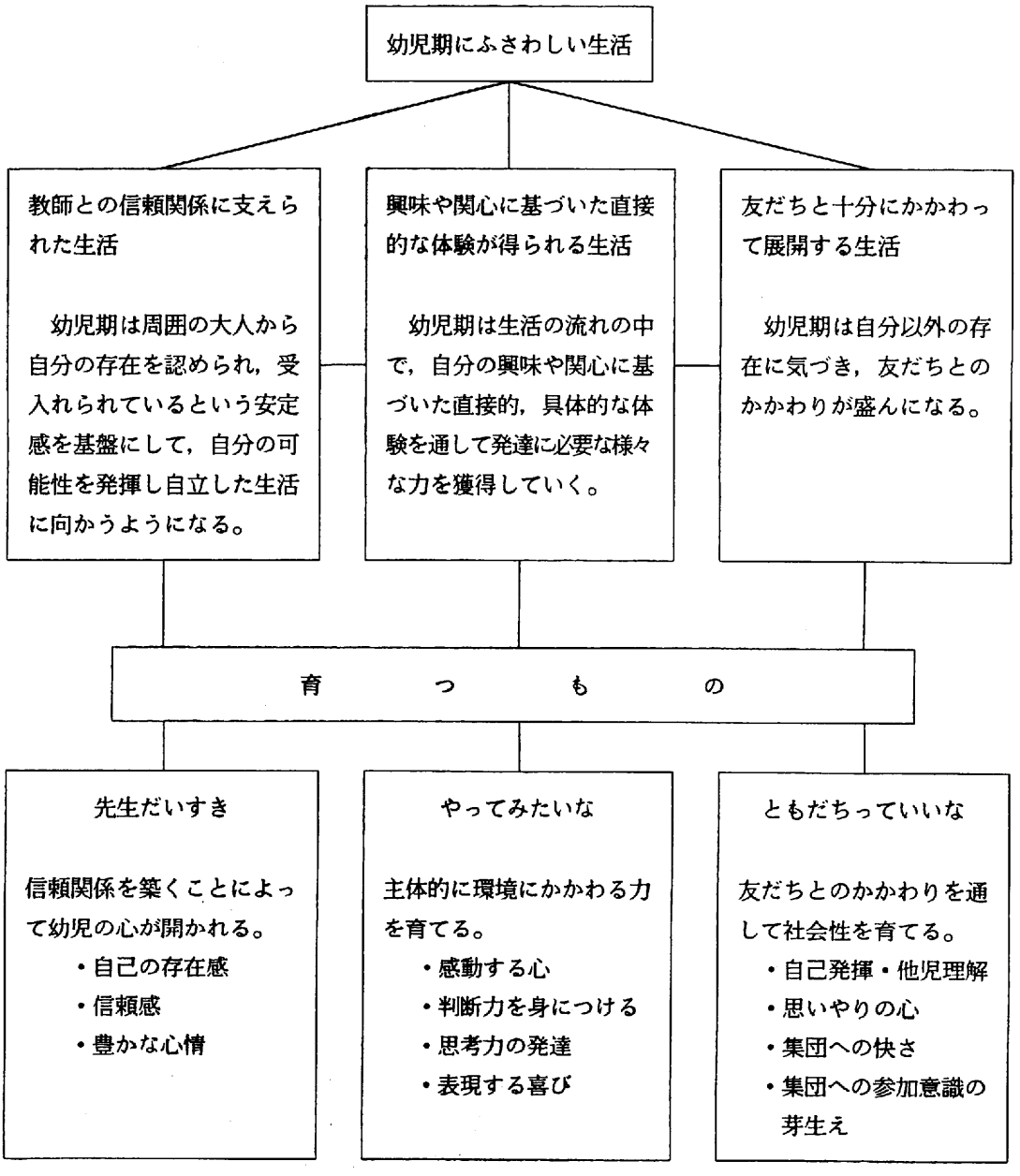


Ⅳ　研究内容

1　幼児理解

(1)　幼児期にふさわしい生活

幼児は幼稚園生活を通して，あらゆる環境（人的・物的）から刺激を受ける。幼稚園生活では幼児は自分からいろいろな環境に興味関心をもって主体的にかかわることによって，様々な活動が展開され，充実感を味わう体験が重視される。



(2) 遊びと友だちの関係

子供同士の遊びや生活の様子を見ていると，最初のうちは同じことをしていてもそこには交わりはない。しかし，遊びそのものにひかれ仲間に加わったり，離れたりまた加わったりと何度も繰り返しながら次第に相手を感じたり知ることによって友だち関係ができてくる。それは，ただ一緒に遊んでいるから友だちということではなく，その遊びの中で自分のもっている力を十分発揮しながら，そこにいる友だちの存在に気づく。更に，一緒に遊んだという喜びや悲しみを分かちあえるような友だち関係へと自然に発展していく。

遊ぶ姿		内面理解
同じ場で同じ遊びをしているが他児とのかかわりがない。	→	一人遊びをしているが他児も同じような遊びをしていることで快さがある。（心の安定）
同じ場で遊んでいる子供同士の遊びのイメージが共通してくると他児とかかわるようになる。	→	一人遊びよりも友だちと遊ぶと楽しく遊べると感じる。（他児への関心）
他児の遊びを見て自分もやりたいと仲間に加わって遊ぶ。	→	他児への意識よりも遊びそのものが気に入り遊びに加わっている。友だち関係もひろがるであろう。（自己満足・友達受容）
大好きな○○ちゃんがやっているから一緒に遊ぶ。	→	遊びそのものより大好きな○○ちゃんと一緒にいて楽しいな。（心の安定）

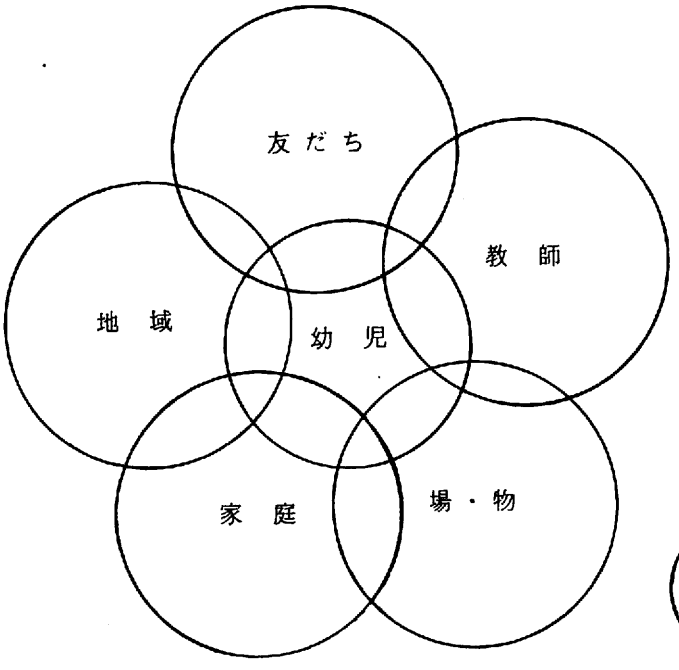
(3) 共に育ちあう意義

幼児は集団生活の中でそれぞれが個を発揮しながら活動している。そして，友だちの刺激を受けて遊びの幅を広げたり，友だちの行動を目標として取り組んだり，学級やグループの課題達成に相互に能力を認め合いながら協力したりし，幼稚園生活を楽しむようになる。この中で，幼児は相互に育ち合っていく。つまり，一人の幼児の育ちがまわりの幼児の育ちに影響を与えるとともに，まわりの幼児の育ちが，その幼児の育ちにも影響を与える。

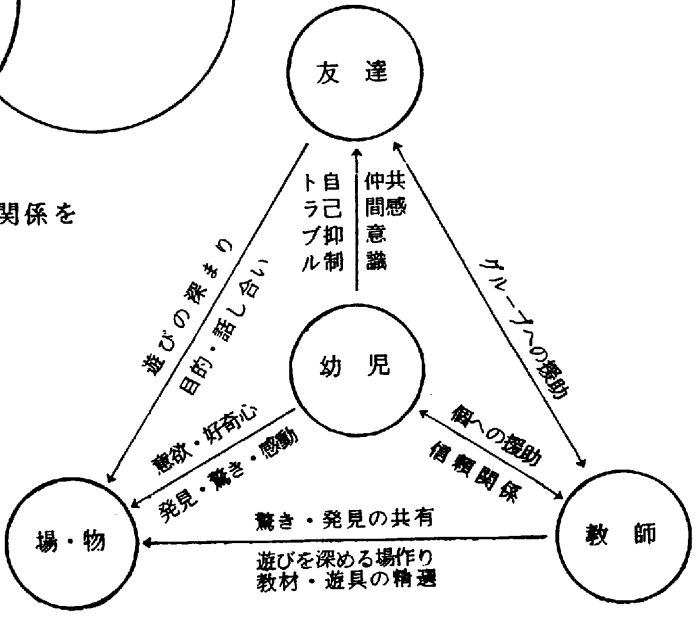
(4) 友だち関係が育つ条件

幼児は，自分が教師にいつも温かく見守られ，受け入れられているという安心感が得られると，自分から周囲の環境に働きかけて安定して活動に取り組むようになる。その中で様々な経験をし遊びを広げていく。このように，人的環境である教師や物的環境である施設設備，遊具，教材などの環境を通して友だちとの望ましいかかわりができてくると，幼児同士が育ちあい，望ましい友だち関係ができて遊びも深まってくる。従って友だち関係の条件として，教師の適切な援助と，幼児が友だちと遊ぶ意欲をかきたてる環境があることが大切である。

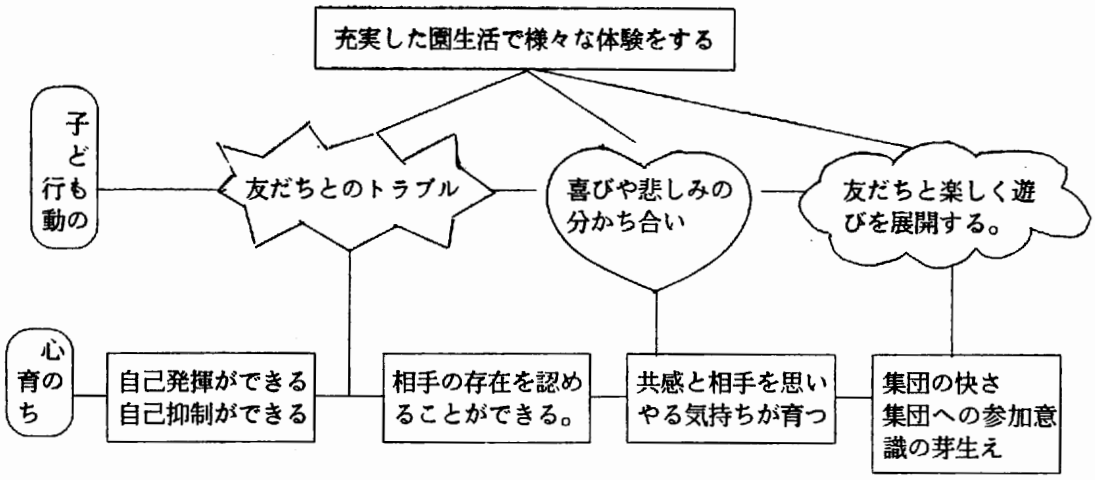
友だち関係が育つ条件



園生活における友だち関係を育てるための手だて



(5) 友だち関係で育つもの



① 自己発揮と自己抑制

幼児の中には，自己の欲求をことばで表現することがまだ不十分な子もいる。まだ感情の抑制が難しく，物の所有や順番，ゲーム，ルールをめぐっての約束事などのくい違いからトラブルが生じる。このように幼児はお互いに自分を出し合い，もめることを通して成長していく。しかし，相手を受け入れられる部分と受け入れられない部分があり，次第に受け入れられる部分が増えていくものである。また相手を受け入れるために遊びを変えていくなど，状況に応じて柔軟に対応することができるようになることも大切である。自分の世界にとじこもるのではなく，自分を変えていく喜びを味わう。自分の力を変えながら生きるということを友達とのかかわりで培っていく。

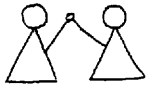
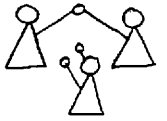
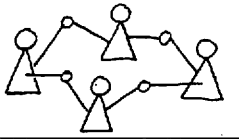
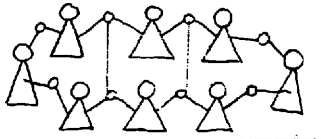
② 思いやりの心

幼児は，まだ相手の身になって考えることは不十分である。しかし，友だちの病気やケガを心配したり友だちのやったことをほめたり，久しぶりに会えたことを喜んだりするなど豊かな心情をもっている。友だちと楽しく遊ぶことは，自分の欲求充足と相手を受け入れる気持ちがうまく結びあい成立する。相手が自分と違った物の見方，考え方，感じ方があることを知り，それを受け入れ認めることができるようになると，相手に対して思いやる行動ができるようになる。

③ 集団への快さと参加意識の芽生え

幼児は，友だちと遊んだり衝突したりしながら喜びや悲しみを分かち合う。その中で，相手の存在を認め，共感や要求をしたり，共に考えたりすることができるようにんなる。そして，他児や教師と共に生活する喜びを感じるようになる。さらに仲間意識が育ち，友だち関係が広がってくると，幼児同士の間に，遊びのルールが生まれたり，教えあったり励ましあうことができ，集団の一員としての快さを感じることができるようになる。

2　友だち関係の発達段階と教師の援助

	Ⅰ　期	Ⅱ　期	Ⅲ　期	Ⅳ　期	Ⅴ　期
社会性の育ち	・同じ場で一緒に過ごせる相手ができる。 ・人への信頼ができる。 ・自立への欲求が出てくる。 ・他児への関心がある。	・自分なりの動きをして遊びながらかかわれる相手ができる。 ・自己存在感，感動の共有体験ができる。	・自分達のイメージを出し合い受け入れあう特定の友達ができる。 ・仲間意識が芽生える。 ・自己主張をする。	・一緒に何かをして遊ぼうとするつながりのある友達関係ができる。 ・自己発揮ができる。 ・イメージの共有ができる。 ・他児理解ができる。	・それぞれのよさを認めあい受け入れあって自主的に目的にむかって遊べる友達ができる。集団の快さ，仲間意識が高まる。 ・遊びの充実感，達成感を味わう。
遊びの広がり	一人遊び→二人で遊ぶ 	二人～三人で遊ぶ 	三人以上で遊ぶ 	グループで遊ぶ 	グループ，学級集団，多勢で遊ぶ 
心の育ち	・情緒が安定する。 ・教師や友達への親近感がでてくる。 「先生あのね」 （あの子のやってるの楽しそうだな） （わたしもやってみたいな）	・友達と遊ぶ楽しさや満足感がある。 ・自己表出しながら自信をもつ。 「この人形かして」「いいよ」 「わぁ－高くなった」 「すごーい」 「いっぱい砂運んだもんね」	・友達と遊ぶ楽しさや満足感がある。 ・他児受容ができる。 「毛糸はやきそばだよ」 「スープもつくろう」 「はいどうぞめしあがれ」 「私も入れて」「いいよ」	・友達と遊ぶ楽しさや満足感がある。 「一緒に乗ろうよ」 「だめ，こわれちゃうよ」 「僕が先だよ」「順番だよ」 「横入りするなよ」	・イメージを出しあって遊ぶことができる。 ・役になって遊ぶ満足感をもつ。 「みんなでサッカーしよう」 「どっちが先にける」 「じゃんけんできめよう」
教師の援助	◆幼児のありのままの姿を受けとめ見守ったり，よい点を認めほめたりして自信をもたせる。 ◆一緒に遊んだり，安心して答えられることばかけをし親しみを持たせる。 ◆一人一人の育ちを確かめながら個に応じた援助をする。 ◆十分に遊べる時間や場の確保をする。	◆友達とかかわって遊ぶ楽しさを十分に味わえるよう時間と場，安全の確保をする。 ◆友達同士のトラブルは両者の気持ちを受けとめ，言い分を聞きお互いの気持ちが分かりあえるような援助をする。 ◆友達とかかわって遊びが楽しめる環境（遊具の数量や配置する場所など）を工夫する。	◆友達と進んで遊びに取り組めるような環境を用意する。 ◆幼児の遊びに応じて幼児と一緒に環境をつくる。 ◆幼児の言動を認め自信をもって進んで遊べるようにことばかけを工夫する。 ◆一緒に遊びの中に入り幼児の発見や驚きを共感する。	◆友達とかかわる中で一人一人の心の動きを大切にしながら友達同士で遊びが進められるようにする。 ◆幼児のもつイメージを捉えてイメージがふくらむような援助をする。 ◆いろいろなものに見立てイメージを表し易い遊具や用具，素材を用意する。	◆一人一人の力が思いっきり発揮できるように援助するとともに友達同士で話し合いながら遊びが進められるようにする。 ◆学級の幼児に認められたりほめられたりする場面を大切にする。 ◆友達とめあてをもって取り組める遊びをなげかける。

3　教師の援助

教師の姿勢

- 温かい関係を育てる。
- 幼児の立場に立って考える。
- 幼児の内面を理解する。
- 幼児自身の発想を大事にする。
- 幼児の遊びや行動を長い目で見る。
- 幼児ができないことを援助する。
- 幼児の安全を確保する。
- 遊びの方向づけ，活動の幅を広げる。
- 遊びの楽しさを共有する。
- 幼児と触れ合い，ありのままの姿を受けとめる

遊びの場における直接的援助

- やりたい遊びを認め見守る。
- 幼児同士の力関係の調整をする。
- がんばったことを賞賛し励ます。
- 困っている時には，助言したり一緒に考える。
- 活動を促し，発展するようなことばかけをする
- 雰囲気づくりをする。
- 幼児と共に環境作りをする。
- 個々の力が発揮できるようなことばかけをする

一人一人を理解するための話し合い

- 保育終了後全教師が集まり，その日の保育について話し合いをする。
- 司会と記録を一人づつおき，記録したものは全員に配布する。
- 個々の幼児を理解し，活動を把握する。
- 話し合いの結果をふまえて，翌日または今後の援助の手だてとする。
- 内容

　教師は，なるべく全園児とかかわり，行動を把握することが望ましいが，各教師が多様な遊び全部にかかわることに無理がある。そのため，幼児一人一人の行動については，誰とかかわっていたか，どこでどんな遊びを展開していたかなど，自分がかかわった幼児の姿を詳しく伝える。特に友だちとのかかわり方や，気になる言動をしている子については，これからの援助の方法を話し合い，共通理解のもとで援助ができるようにする。遊びの内容は充実していたか，前日の友だちや遊びとのつながりはどうなっているのか，新しい遊びの発見はなかったか，環境構成は適切であったか，友だち同志のつながりや遊び方はどのように変化しているのかなど話し合う。

- 話し合いの中から，継続し発展させたい遊びや問題点を見い出し，翌日からの援助の方向づけをする。
- 話し合いの記録は，全園児の行動と名前を記録しているが，一人一人の詳しい言動は，各担任が記録をとり，幼児の内面理解に努め，今後の指導の手だてとする。

4　友だちと十分に遊びこめる時間の工夫

従来の保育は幼児が登園してから降園までの活動の時間を細かく設定し，一斉に同じ活動をするという細切れの保育形態になりがちであった。しかし，このような保育形態では遊びの深まりや友だちと十分にかかわることができずつながりのない保育になってしまうのではないかと考え，なるべく子ども達自身で自分達の生活の場をつくるために時間の使い方も共に話合い子どもの思いを十分にくみ取ることにした。

(1)　日々流動的な時間配分

好きな遊びの時間は日々流動的にし固定しない。それは遊びの種類によって短時間で満足する遊びと「もっとたくさんやりたい」と長時間遊びを展開し，充実感を味わうことがあるのでその日の活動や友だちのかかわり方によって時間を調整する。

(2)　おやつの時間の工夫

・子ども達が「もっと遊びたい」と遊びが盛り上がり遊びに没頭している場合には，遊びが中断されないように，その場でおやつを食べるなど，おやつも遊びの一部分として考える。・遊びを継続し十分遊び込める為に，一斉におやつを食べるのではなく，レストラン屋，くじ引き屋などの遊びの中で，お客さんになって食べるなど，おやつの方法を工夫することが必要である。

5　環境の工夫

(1)　友だちといて楽しい環境

①　優劣のない関係

保育をする中で，競争による方法で，相手に負けないような意識の持たせ方をすると，優越感や劣等感をもつようになる。そして，相手をさげすんだり，自己を発揮せず消極的になったりする。子ども同士が対等平等の関係だと楽しく遊びが展開できる。

②　共に援助しあう

子ども同士がお互いに相手を認める雰囲気をつくり，相手をけおとすことなく共に援助しあうことができると，意欲的に新しい活動に友だちとチャレジしていく。「○○ちゃんはすごいんだよ」「△△ちゃんはとっても上手だよ」と成長ぶりを認めほめあうことのできる環境が大切である。

③　場作りをする

子ども同士で遊びを展開する時に，心が安定しゆったりとした気持ちで遊べることが望ましい。そのためには，遊びの空間が多くあり，自分達で遊びの場を選び，場作りができることが友だちといて楽しい環境となる。

(2)　友だちと十分に遊び込める時間

幼稚園の環境が子どもの活動にふさわしい場として，また友だちと十分にかかわることのできる場となるように教師は常に遊びに適した遊具や教材の選択，配置を考慮しなければならない。（図１）

園内の環境図（図１）

友だちと十分に遊びこめる環境
（◎10月の活動　◆教師の援助）

◎縄を使って

女児が興味をもってやり５～６人の友だち同士で遊んでいる。縄でいろいろな遊び方を工夫してリズムやゲームも楽しむ。

◆友達と一緒に協力して遊ぶことができるようにことばかけをする。

◆いろいろな縄遊びができるように使い方を工夫したり，長短の縄を準備し縄遊びの楽しさを知らせていく。

◎固定遊具を使って

ジャングルジム，すべりだい，うんていなどを使って高鬼や氷鬼ごっこをしたり，ドラゴンボールごっこをする。

ブランコでは友だちと二人乗りをする。

◆友だちと遊び方を工夫したりルールを考えたりできるように援助したり見守る。

◆危険のないように気をつける。

◎竹馬を使って

竹馬に乗れるまで挑戦したり友だち同士で支えあう姿が見られる。

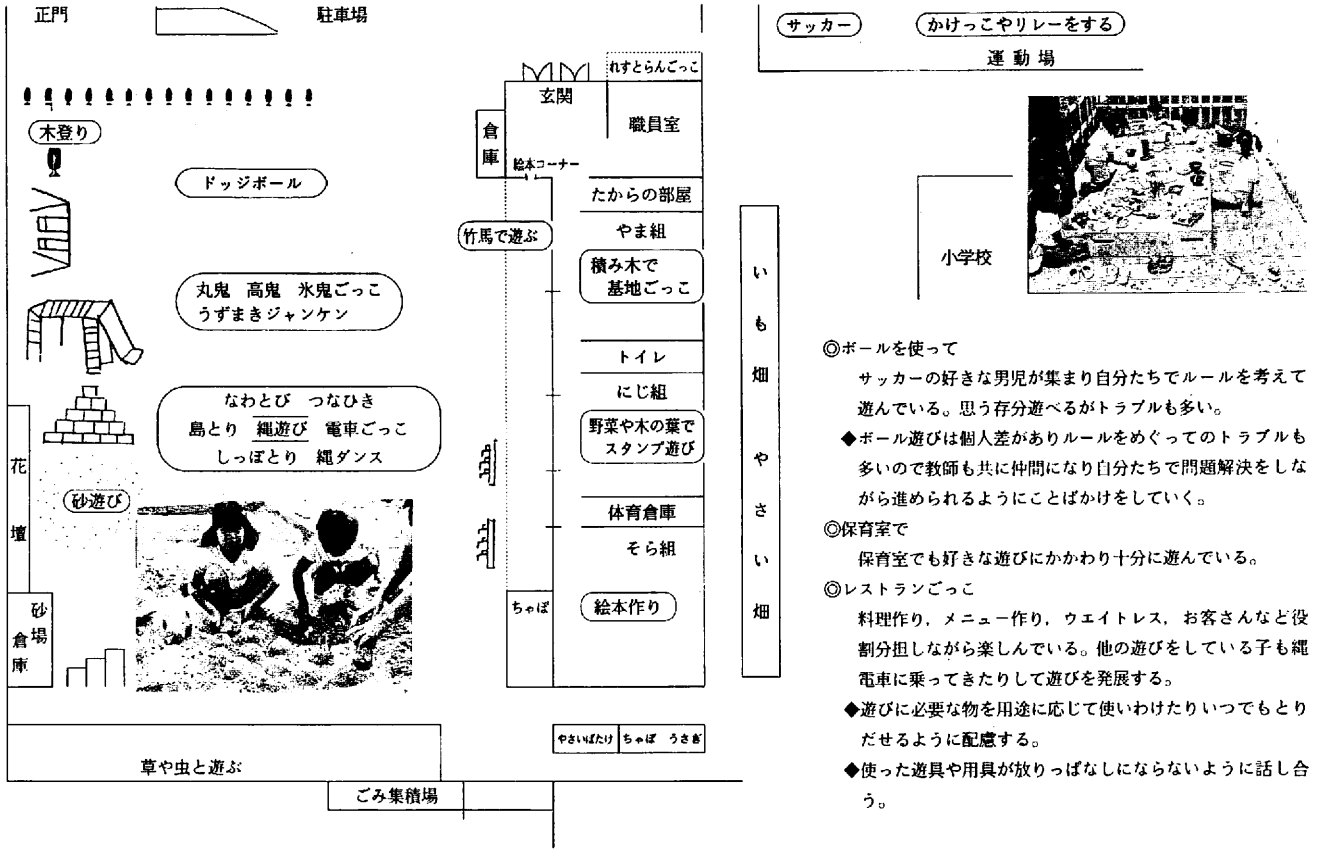
１・２・３段乗り，片足けんけん乗り，フープ飛び越しなどに挑戦する。

◆自分なりに目的をもって取り組んでいる姿を必要に応じて補助したり励ます。

◆使った後は所定の場所に片付けるように促す。

◎砂遊び

ままごと，トンネル作り，団子作り，基地ごっこなどをして遊ぶ。



◎ボールを使って

サッカーの好きな男児が集まり自分たちでルールを考えて遊んでいる。思う存分遊べるがトラブルも多い。

◆ボール遊びは個人差がありルールをめぐってのトラブルも多いので教師も共に仲間になり自分たちで問題解決をしながら進められるようにことばかけをしていく。

◎保育室で

保育室でも好きな遊びにかかわり十分に遊んでいる。

◎レストランごっこ

料理作り，メニュー作り，ウエイトレス，お客さんなど役割分担しながら楽しんでいる。他の遊びをしている子も縄電車に乗ってきたりして遊びを発展する。

◆遊びに必要な物を用途に応じて使いわけたりいつでもとりだせるように配慮する。

◆使った遊具や用具が放りっぱなしにならないように話し合う。

◎飼育物の世話

チャボ　コオロギ　インコ　カマキリ　てらびあの世話をし，観察したり遊んだりする。

◆特にチャボとの接し方が乱暴になりがちなのでいたわって遊べるように促す。

◆えさをあげすぎないように気をつける。

虫探し　草花摘み　散歩をする

◎散歩に行く

運動場の周辺やマラソンコースを散歩しながら虫探し木の実木の葉集め、いろいろな発見をする。友だちとの会話もはずむ。

◆散歩しながら秋の自然に触れ、虫や植物に興味をもちそれらを観察したり遊びに使ったりする。

6　友だち関係を深めるための家庭との連携

家庭との連携を図るための基本的な考え方

① 幼児が生活するために何が役立つか，幼児の発達にとってどうすることがよいかなど一人一人の幼児を中心に据えて，教師と父母が力を合わせ，幼児の生活を充実したものにしその発達を促していく。

② 相互理解をするために

- 家庭や親の教育観や育児観は必ずしも幼稚園の方針と一致するとはかぎらない。家庭の様々な事情や考えをよく聞き理解し，多様な価値観を受けとめて，お互いの考えや思いを出し合い信頼関係を築く。
- 家庭に過度な負担をかけることのないようにする。
- 親の立場を尊重した話し方や，記述の仕方についての配慮をする一方相手が聞きたいこと知りたいことを，わかりやすく楽しく伝えようとする姿勢をもつ。
- 園の教育方針の共通理解を図る。

家庭との連携の方法

園便りの発行　学級便りの発行　学級懇談会　グループ懇談会　個人教育相談

家庭訪問　保育参観　保育参加　電話連絡による効果的活用

(1) 共に育ちあう友だち関係をつくるためのグループ懇談会

（事例）同じ団地から通園する女児５人の友だち関係

５人のプロフィール

（家族構成）	（保育園通園歴）	（性格・行動）
S子－両親・姉・弟・本人	1年	ことばや遊び方が幼い。 友だちの中では自己を発揮している。
H子－両親・８人兄弟の末っ子	家庭保育	おとなしくまじめである。 自分の思いを十分に出しきれない。
B子－両親・姉・弟・本人	3年	自己主張が強くことばが荒い。 ささいな事で友だちと衝突が多い。
T子－両親・兄・姉・本人	2年	消極的でことば数も少ない。 友だちを頼っての遊びが多い。
A子－両親・弟・本人	2.5年	おませなことばや態度が多い。 ごっこ的な遊びを好んでやる。

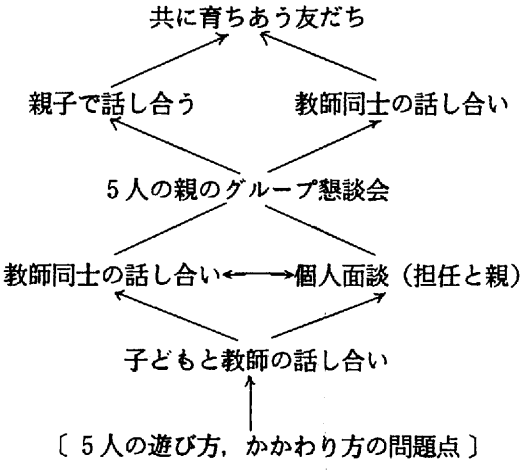
- ５人の女児は同団地から通園し園でも降園後も行動を共にする遊び仲間であるが遊びの中でのトラブルもかなり多い。

園での遊びの様子	教師の援助
・登園すると，お互いに誘い合い園庭でチャボと遊んだり鬼ごっこ，ままごと，砂遊びなどの遊びを喜んでしている。	・５人の遊んでいる様子を見守りながらT子H子が自己発揮し，二人の思いが出せるように働きかける。
・自己主張の強いA子，B子，S子が遊びの中心的存在でT子，H子が追従していることが多い。 ３人の強い子同士が意見の衝突でトラブルが生じると「S子ちゃんB子と遊ばんでよ」「一緒に幼稚園に行かんでよ」など相手に対してつまはじきをしたり，ひどい口げんかをする事がよくみられる。お互いにT子，H子を自分の側に引き寄せようと対立することが続き，５人の友だち関係が，うまくいかない状況がよくある。翌日までけんかが尾をひく場合もある。	・トラブルが生じた時は，お互いの主張をゆっくり時間をかけて聞いてあげ相手の気持ちが伝わるように，援助したり話し合えるようにする。 ・降園時には，どの子もひとりぼっちにしないように声かけをし，教師も途中まで送ってあげ，仲良く帰れるように促す。
・５人で遊びを展開することはできるが他児との交流をしようとする姿が見られないので教師が他児も仲間に入れて遊べるように促すが持続しない。他児たちもかかわろうとしない傾向になってくる。	・５人だけでなく他児がやりたい，遊びたいと来た場合はどうしたらよいか考えさせる。 ・教師間でも，５人の子どもたちに同じように対応ができるように，話合い共通理解をする。
降園後の遊びの様子	
・降園時もほとんど一緒に帰りA子，S子の家で遊んだり近くのスーパーや公園であそんでいる。お互いに電話で「遊びにいってもいい」と連絡しあい交流しているが，各家庭の帰宅時間，金銭の与え方，しつけの相違などから不信感やとまどいがでてきた。	・降園後も５人でよくかかわって遊んでいるので「どこで遊んだの」「家でも一緒に遊べていいね」など話しかけ降園後の様子も把握し，園での一人一人の援助の手だてにする。

・グループ懇談会を実施する。

以上述べた５人のかかわりあいや問題点は，そのつど子ども同士，教師と共に又個別に親との話しあいをしたが，更に，グループ懇談をすることによって，親同士が家庭の事情や考え方，しつけなど相互理解をし，共に育てていこうという姿勢があれば，共に育ちあう友だち関係ができるであろうと考え，グループ懇談会を実施した。

親の意見	教師の願い
・「よく遊びに来るけれども6時になってもまだ大丈夫だといって帰ろうとしないで困ったことがあるんですよ」 ・「遊びに来ても一緒に遊んでいるわけでなくテレビを見ている子，おもちゃで遊ぶ子，本を見たり違うことをしているんですよ」 ・「おこずかいをあげている家庭もありますか？一人がお金を持っていて一緒にお菓子を買って食べたり遠くのスーパーまでいったこともありますよ」 ・「よく〝もうけんかしたから遊ばない〟といって帰ってくるんですよ」 ・「朝は友だちと一緒に幼稚園に行くと寄り道して遅刻しているようなので一人で登園させようと思うのですが」	・家庭では子どもの一方的な訴えで相手がどうであるか考えてしまうことが多く，親が感情的になったり「もうけんかばかりするから一人で遊びなさい」「幼稚園には一人で行きなさい」などの対応をしているようだが，これではみんな一人ぼっちになる。 ・自分の子があの子とかかわらなければ解決できるという気持ちで親が子どもの友だちを選んでしまっては子どもの心をふみにじることになる。 ・親同士がお互いに連絡をとりあい悩みを相談したり協力することによって子どもたちにも良い影響を与えるのでささいな出来事でも常に話し合って欲しい。 ・どの子も受け入れて共に育てる気持ちでかかわってもらいたいと願う。



〔話し合い後の親子の変容〕

・5人の遊びの場で，互いに相手の意見を受け止めることができ，譲り合いや思いやる気持ちが育ちあい特に顔の表情にやさしさがでてきた。

・弱かったT子，H子が積極的に遊び，自己主張する場面も見られるようになった。

・親同士で相手の良い面を認め合うことばもあり親子共に相手を思いやる気持ちがでてきた。

・誕生会やクリスマス会など親子で交流したり，親しく声をかけあうことができ，子どもたちの遊び方を気軽に話したりできるようになった。

［考察］

・日頃の遊びの中で，自己主張だけが先行したり嫉妬が続いたりトラブルの絶えない5人の女児が，お互いに相手を理解し認め合うことができた。それはくやしさ，葛藤，いたわるなどの様々な感情体験をし，更に一人一人に適切な教師の援助が加わり培われたことと思われる。

・教師同士，教師と親，親同士が連携し相互理解することにより子ども同士のつながりが一層深まったと思われる。

7　保育事例

(1)　他児とかかわろうとしないT子

T子のプロフィール

昭和６０年９月生まれ。両親・兄・姉・本人の５人家族である。３～４才の頃は保育園へ通園する。共働きのため降園後は学童保育へ通う。家庭では甘えん坊でよくしゃべる。

T子の園での様子	教師の願いと援助
（入園当初） ・自分のことはきちんとできるが，顔の表情が堅く，他児とかかわろうとせず遊びを傍観し一人で絵本を見たり，絵を書いていることが多い。 ・名前を呼んでも返事をしない。 （６月～７月） ・同じ学童保育に通っているＡ子やＹ子と砂遊びやままごとをしたり，おしゃべりもするがその二人以外とはかかわりがみられない。 ・名前を呼ばれたら返事をするようになる。 （９月） ・Ａ子Ｙ子以外の子ともかかわろうとし遊びにも広がりがみられる。３～４人でダンスをしたりマイクを使って歌をうたうようになる。 ・友達が遊びに誘うと笑顔で接することができ除々に自分の気持ちを，言葉や体で表現できるようになる。	・幼稚園では，好きな遊びができることを知らせ不安をなくすようにする。 ・心の安定のために，好きな絵本がいつでもみれるように配慮する。 ・他児の遊びを傍観している事が多いが無理に遊びにひっぱらず様子を見守る。 ・Ａ子，Ｙ子に誘われて仲間に加わるようになったので教師も話すきっかけをつくり楽しく遊べるよう援助する。 ・「Ｔ子ちゃんおもしろいよやってみない」「Ｔ子ちゃんがいるともっと楽しいけどね」と誘いかけを多くする。 ・クラスの子どもたちにもＴ子の遊びや手伝ったことをほめ認め，一緒に遊べるようになげかける。 ・砂遊びから他の遊びも友だちとやるようになったので「Ｔ子ちゃんはダンスも上手ね。きっと歌もうまいでしょう。友だちと一緒に歌ってごらん」と友だちと交流する楽しさを味わわせる。

友だちと楽しく歌うＴ子

砂遊びをするＴ子

考察

Ｔ子のありのままの姿を受けとめ一人遊びを楽しみながら心の安定を図り，他児とかかわりがもてるように援助してきた。しかし，まだ自分の思いを十分に発揮できないので，友だちと心を通わすことの喜びを，多く体験させ見守っていきたい。

(2) 自己主張が強く仲間はずれになったK男

K男のプロフィール

昭和６０年４月生まれ　家族構成：両親・本人（一人っ子）　２年間保育園へ通園
両親が共働きのため降園後は祖母宅で過ごすが，９月から学童保育へ通うようになる

	（１学期）遊びをリードするK男	K男に対する他児の思い	教師の援助（遊びを見守る）
自己発揮	入園当初から自分とやりたい遊びにすぐ取り組むことができ，特に戸外で活発に動き，運動場遊びを好んでやる。「鬼ごっこする者この指とまれ早くしないと電気が切れる」とみんなに声をかけ仲間を集めて遊んだり，基地ごっこ，探険隊ごっこなど自分で遊びを考え，楽しく遊びを展開できる	いろいろな楽しい遊びを考えるので頼もしい	K男を中心に他児も満足して遊んでいるので遊びを見守りながら「たのしそうだね」と声かけしたり遊びの展開を楽しみに待つ。
↓	（９月～１０月）トラブルが多くなるK男 これまでK男が中心に遊んでいたが２学期になると，他児の自我が芽生え自己発揮できるようになり相互に意見の対立が多くなってきた。K男は他児の意見を無視したりとりあわないことがあるので，口げんかとなり遊びが中断するようになった。	自分勝手ばかりしていやだな。 K男は僕の言うこと聞いてくれない。K男の言う通りしないとおこるから，おもしろくない。命令ばかりするからいやだ。	言いあいしている様子を見守りながらK男や他児の主張を受けとめ，みんながどうすれば楽しく遊ぶことができるか一緒に話しあうようにする。 母親と面談し，直接の原因と今後の対応を話し合う。
トラブル	（１１月）登園拒否をするK男 他児から受け入れられないことが多くなったK男は，登園をいやがり欠席がちになる。「みんながいじめる。仲間にいれてくれない」と母親に訴えているようだ。母親と一緒に登園しても又しばらく休んだりを繰り返すようになる。		他児へは，K男がどうしてこないのか説明し，K男に対する意見を聞きK男とみんなとの約束ごとを決める。
↓	（２月）発表会でリーダーとなるK男 自己抑制ができるようになり他児から受け入れられるようになったK男は，得意なエイサーを友達に教え，発表会までの練習期間もリーダーとなって，共に励ましあい協力してすすめることができた。	K男はエイサーの名人だ。教えてもらおう。	K男が自己コントロールできるように声かけをし，発表会まで協力して取り組むように援助する
葛藤			
↓			
自己変容			

(1) 「こどもげんきかい」で共に育ちあった仲間達

「こどもげんきかい」の実践

① 取り組み日時 …… 1月9日～2月15日

② ねらい

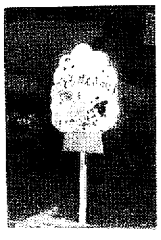
・全園児や友だち同士で，話し合いから発表するまでお互いに協力しながら取り組む。

・子どもたちの日常の生活の様子や成長の姿を，親に披露する。

③ 経過

これまでの発表会では，全体種目・クラス種目・自由種目などの種目や人数は，教師主導で取り組んでいたが，今回は友だち同士のつながりを考慮し，子どもたちが日頃の遊びの中からやりたい種目を考え，友だち同士で発表できるような取り組みをした。

月日	活動の経過	教師の援助
1/9	全園児で発表会について話しあう	・発表会のイメージがそれぞれ違うので，全体で話しあいをし，共通のイメージをふくらませることができるようにする。
1/13	・発表会の名称 18種類の意見の中から「こどもげんきかい」に決める。 ・種目 24種目の案から14種目決定 ・一人で全体種目2 自由種目2で4種目をやる	・全体で話しあったり，友だち同士で話しあう機会を多くし，自分達で活動していけるような雰囲気づくりをする。 ・やりたい種目が決めきれない子に対しては，教師がその子の興味のありそうな種目に誘い自信をもたせていく。
1/14	種目別に集まり練習方法を話合う ・グループのリーダーを決める。 ・練習の時間や場所を決める。	・子ども同士で決めた方法をなるべく取り上げるようにし，つまづいた時に援助してあげる ・自由種目のグループが決まると練習だけでなく遊びの場，おやつ，弁当会などもクラスをオープンにし，グループの子ども達のつながりが深まるような活動形態にする。
1/16	全体種目・自由種目の練習をする。 	・友だち同士で，教えあったり励ましあったりできるようにことばかけをし，友だち同士のかかわりを大事にする。

	小道具作り ・グループごとに，それぞれ必要な道具をつくる。	・なるべくクラス中心ではなく，自由種目のグループと担当の教師が，共に生活する場を多くする。 ・各グループの練習の様子を，帰りの会で報告しあい意欲的に取り組めるようにする。
1/20	いろいろな係を決める ・放送係 ・案内板の絵を書く係 ・飾りつけ係 ・プログラムを作る係	・友だち同士で相談しながら係の仕事が，最後までがんばってできるように，助言したり励ましたりする。
1/24	1月の誕生会で発表したいグループはみんなの前でやってみせる。 ・自信をもってやるグループや失敗しながら繰り返しやるグループなど様々である。	 ・友だちの演技を見て「すごい上手」「私もやりたい」「もっと大きな声でやって」など感嘆や思いやりの場面を大切にし，どの子も十分に自己発揮できるように見守り援助する。
2/10	個人用のプログラム作りをする。	
2/13	リハーサルをする 	
2/14	こどもげんきかい	・友だち同士で協力して練習した成果を自信をもって発表できるようにことばかけをする。

④　みんなで決めた種目と人数

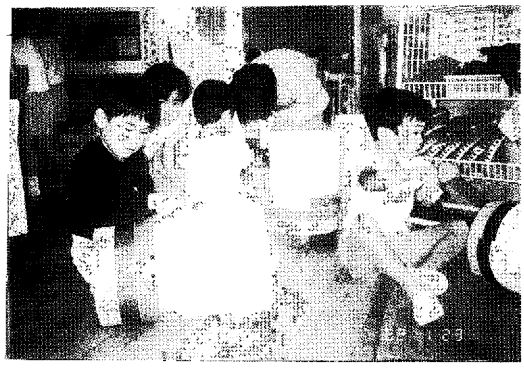
・全体種目 …… 「おおきなかぶ」の劇　とびばこ運動

・自由種目（1人でA・Bの種目から1つずつやる）

Aリズム的種目…ダンス「タタロチカ」（16人）・ハイジの踊り（10人）
太鼓「どんどこあばれじし」（17人）・歌と合奏（19人）
人形劇「おおかみと7ひきの子やぎ」（9人）・エイサー（18人）

B運動的種目……なわとび（18人）・からてと組体操（18人）・こままわし（12人）
たけうま（22人）・まりつき（18人）・おてだま（10人）

⑤　友だち同士で取り組んだ「こどもげんきかい」の練習の様子



⑥ 反省と考察

- 子どもたちと教師が話合いを何回も重ね，子どもの思いを十分にくみ取ることにより活動に意欲的に取り組むことができた。
- 気の合う友だち同士がひとつの目的に向かって取り組んだことは，教えあい，励まし合い，相手を認めたり思いやるなど共に育ちあう姿が見られてよかった。
- 友だち同士で話合いながら 必要な物を作ったり，踊りや動作のふりを考えたり自分たちで作り出していく姿も見られた。
- クラスをオープンにし種目別のグループと担当教師が練習時だけでなく，生活を共にすることで相互理解し，充実感を味わい望ましいかかわり方ができたことと思われる。
- 教師が子どもにまかせる部分と教師が刺激していく部分を見極め，更に検討していかなければならない。

「こどもげんきかい」の父母の感想

「こどもげんきかいお疲れさまでした。日頃の子どもたちの様子が，よくわかる発表会でした。とっても素晴らしく感激しました。子どもたちのやる気と先生方の忍耐力と，どの子も伸ばしてあげようという姿勢が結集されていたと思います。一年生になっても，友だちと協力しあう姿勢を忘れないように，素直に伸びていく子になってほしいと思います。
結果だけでなく，過程を大事にできる親でありたいと，常に思っています。前田幼稚園て素晴らしいですね。」

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

(1) 教師が幼児との信頼関係を築き，幼児のありのままの姿を受け止め，一人一人にあった援助の工夫をすることが，幼児が積極的に友だちとかかわり「友だちっていいな」という気持ちをもち，共に育ちあうことができることを実感した。

(2) 幼児にかかわる教師や親の言動が，友だちとのかかわり方をも左右することがわかった。

(3) 教師同士，教師と親，親同士が幼児のことを共通理解し，連携をとることの大切さがわかった。

(4) 友だち関係は短時間で培われるものではないので，あせらず長い目で幼児の行動を見守り，理解するように心がけたい。

2 今後の課題

(1) 幼児一人一人の行動の理解や，内面理解をするための教師間の話し合いの充実を図り，研修をしあうこと。

(2) 友だちと楽しく遊べる環境，雰囲気づくりを常に考慮すること。

(3) 幼児の援助者であるとともによき理解者となるよう努力すること。

おわりに

4カ月間の貴重な研修期間中，ご指導，ご助言下さいました宮城久子指導主事はじめ各指導主事の先生方，いつも温かく励まして下さった前田貢所長，諸見里係長，事務の皆様，研究員の先生方には心より感謝申し上げます。また保育実践においては，惜しみない協力を頂きました前田幼稚園の先生方には感謝の念でいっぱいです。ありがとうございました。

[引用・参考文献]

保育の心	平井信義　共著	建帛社
家庭との連携を図るために	文部省	世界文化社
幼稚園教育指導書増補版	文部省	フレーベル館
保育実践用語辞典	西久保礼造　著	きょうせい
人間関係	森上史朗　編著	ミネルヴァ書房
幼稚園教育要領の解説と実践	高杉自子　編著 平井信義 森上史朗	
生活をつくる子どもたち （倉橋惣三理論再考）	飯島婦佐子　著	フレーベル館
幼児教育研究	栃木県教育研究所研究紀要９３集９８集	
教育課程編成のための資料	川崎市教育委員会　川崎市立幼稚園協議会	